



千葉県誕生150周年記念 オランダ文化交流事業

「テオ・ヤンセン展」



「テオ・ヤンセン展」リ・アニメーションの様子

開催概要

- 会 期／ 令和5年10月27日（金）
～令和6年1月21日（日）
- 会 場／ 第1・2・7展示室
- 休 館 日／ 毎週月曜・月曜日が祝日の場合は翌日。
年末年始（12月28日～1月4日）
- 入 場 料／ 一般1,000円、高校・大学生500円
（中学生以下・65歳以上・
障害者手帳をお持ちの方と
介護者1名は無料）
- 主 催／ 千葉県立美術館
- 企画協力／ ㈱Media Force・㈱Gakken

関連事業

- ストランドビーストin千葉みなと
12月3日（日）
- ミニビースト競走
12月24日（日）・1月7日（日）
- ストランドビースト初歩き
1月5日（金）、1月10日（水）、1月17日（水）

1 展覧会

千葉県誕生150周年を迎えたアニバーサリーイヤーの今年度、当館ではオランダ王国との文化交流事業としてオランダ出身の世界的アーティストであるテオ・ヤンセン氏（1948-）の展覧会を開催しました。ヤンセン氏はオランダの観光リゾート地であるスフェベニンゲンの出身で、芸術と科学を融合した作品制作から、「現代のレオナルド・ダ・ヴィンチ」とも称されています。

本展覧会では様々な‘進化’を見せるヤンセン氏の代表作「ストランドビースト（砂浜の生命体）」14体と、ビーストの系統樹、ビーストがスフェベニンゲンの砂浜を闊歩する映像や、ヤンセン氏自筆のアイデアスケッチなどを展示し、多くのみなさまに鑑賞いただきました。

中でも人気を博したのは、毎日巨大なストランドビーストが動く実演「リ・アニメーション」です。圧倒的なスケールの造形作品が、風を使って作られる「圧縮空気（館内ではエアコンプレッサーを使用）」のみで、まさに生き物のように動きます。それらがすべてプラスチックチューブやウレタンチューブなど、身近な素材で作られているこ

となどにも驚かれる方が多く、普段は静かな美術館も、本展会期中は、毎日歓声が響きわたりました。

2 屋外イベント「ストランドビーストin千葉みなと」

12月3日には、千葉ポートパークで「ストランドビーストin千葉みなと」を開催しました。館内とは異なり、ビーストが風之力で動く姿などを、1万人以上の方に見学いただきました。（学芸課長 植野百代）



ストランドビーストin千葉みなと

展覧会

会期／令和5年7月19日(水)～9月18日(月・祝)(第3・8展示室) 休館日/毎週月曜

房総の海をめぐる光と影とアート展 クワクポリョウタ《コレクション・ネット》

クワクポリョウタは、電子機器をはじめ様々なメディアを使用して作品制作を行うアーティストです。2010年に発表した光源をつけた鉄道模型によるインスタレーション作品《10番目の感傷(点・線・面)》以降、光と影によって鑑賞者自身が内面に体験を紡ぎだす作品を展開しています。本展では、クワクボによる「房総の海」をテーマとした新作を制作しました。作品は主に2部から成り、前半では、クワクボが千葉県のマスコットキャラクターであるチーバくんと掛け合いをしながら、地理、自然、産業、文化等、多側面から千葉県をリサーチし、習作を重ねました。後半では、さまざまな習作に基づく、光と影によるインスタレーションが鑑賞者をどこか懐かしい、物語を感じる世界へと誘いました。

千葉県誕生150周年を記念した事業、県立美術館からの依頼。真摯に考えたクワクボにとって、大きすぎて無理難題のテーマでした。千葉県誕生150周年を記念するようなひとつのモチーフを求めましたが、一筋縄では行きません。それこそ、千葉県の多面性を表していると言えるでしょう。呻吟した結果、クワクボは悩みの過程すらも作品

として提示し、アプローチしたテーマは、1 落花生、2 千葉駅、3 なのはな体操、4 浦安の進化、5 チバニアン、6 伊能忠敬。なるほどと誰もが納得するテーマもあれば、アーティストならではの角度から見たテーマもあり、千葉県を新鮮で新たな目で発見するような展覧会でした。

(学芸課 松田直子)

クワクポリョウタ《LOST#19 しおさいのくに》2023年
撮影:木奥恵三

企画展

会期／令和6年1月30日(火)～令和6年3月24日(日)(第1・2・6展示室) 休館日/毎週月曜・2/12は開館し、翌日休館

アーツ・アンド・クラフツとデザイン
—ウィリアム・モリスからフランク・ロイド・ライトまで—

産業革命の波が押し寄せる19世紀、急速な工業化によって人間が持つ創造性が奪われていくことに反発したイギリスのウィリアム・モリス(1834-1896)とその仲間たちは、中世の手仕事によるものづくりに立ち返り、生活と芸術の統合を目指した活動を始めます。モリスらの活動に感化された多くのデザイナーや建築家たちは、「アーツ・アンド・クラフツ運動」と呼ばれる一連の運動を発展させ、やがてその影響はイギリスを超えて世界各地へと広がります。特にアメリカでは、ガラス作品の製造で知られるティファニー・スタジオや、ものづくりにおける機械利用の重要性を唱えた建築家、フランク・ロイド・ライト(1867-1959)などを中心に、多様な広がりを見せました。

本展覧会では、アーツ・アンド・クラフツ運動を牽引したイギリスとアメリカの作家たちによるテキスタイル、壁紙、家具、ガラス製品、宝飾品、書籍など約140点を通して、今日のライフスタイルにも大きな影響を及ぼしている「優れたデザインと質の高いものづくりが生活を豊かにする」というアーツ・アンド・クラフツの理念と、その広がりをご紹介します。

また、千葉県立美術館の独自企画「千葉とアーツ・アンド・クラフツ」では、千葉県立美術館が所蔵する約2,800点の作品のうち、浅井忠をはじめとする同運動の影響を受けて活躍した県ゆかりの作家による作品を紹介するほか、研究員による論考集を刊行するなど、同運動が千葉県の文化芸術に及ぼした影響について読み解きます。(学芸課 神野有紗)



ウィリアム・モリス《いちご泥棒》1883年、Photo ©Brain Trust Inc.

千葉県立美術館での一年を終えて



来場者の質問に丁寧に対応する「飼育員」さん(中央)

1月21日まで開かれたテオ・ヤンセン展は、少々変わった美術展でした。オランダのアーティストによって数カ月かけてアトリエと海辺で作り上げられるプラスチック・チューブ製の《ストランドピースト》が14

点。15メートルを超える大きさのもの。本来、北海沿岸の砂浜で、風の力によって生き物のように動く作品たちです。風のない展示室で、そのうちの3体を、コンプレッサーの助けを借りて毎日計7回動かしました。これは「リ・アニメーション」と呼ばれ、動かすスタッフを「飼育員」といいます。展覧会に付き添う飼育員3人が、交代で操作してくれました。10分のプログラムは、録音テープによる説明ののち、数回、数秒間だけ動かすもの。テープの説明を黙って聞いていた観客は、作品が動くと、低く「おおーっ」という声をあげます。週末の100人近い観客がいるときは、思いがけない大きい音の塊でした。終わると、作品のそばに寄って細部の、動いたばかりの足の構造などに見入る方が何人も。飼育員に質問する人も少なくありません。「どうやって組み立てるの」「どうやってオランダから運んだの」「風は、どうやってため込むの」「これをつくるのに、どのくらいの時間がかかるの」などなど。

この展覧会は、去年、千葉にやって来る前に高知と松江の

美術館で開かれました。飼育員に「他の美術館のお客さんと比べて、千葉の人たちの特徴って、何か感じますか」と訊いてみました。「人懐っこい人が多いですね」。なるほど。人懐っこさの原因は、もちろん一つではないでしょう。海と川に囲まれた温暖な風土が人懐っこい個性をつくるのかも知れません。30年前に亡くなった祖母は船橋生まれで、子どもの頃、連れられて東京から何度も船橋の「親戚の家」に遊びに行ったことがあります。祖母はたくさんいた姉妹の末妹で、すでに亡くなっているその姉妹の子どもたちが集まって、「おばさん、おばさん」と大騒ぎしてくれる実家に行くのが、たいそう好きでした。子ども心に、東京の親戚たちよりもずっと温かい人たちだったなあ、という思い出があります。

あるいは、千葉県立美術館の空間がそこはかとなく、だれでもが持つ人懐っこさを引き出すという面もあるかも知れません。一見、人を寄せつけないような焼成煉瓦の固さをまとった外観なのですが、いったん中に入ると、外の景色が心地よく眺められ、水平性が強調された室内は意外と落ち着きます。開館して50年。見た目がくたびれた設備も少なくありませんが、逆に、この古さが魅力になるとも感じます。1970年代らしいメタボリズム建築の細部には、人の手が作りだした痕跡が眼につき、何とも言えない柔らかい空気を醸し出しています。

人と建物が混じり合って生み出すこの空間の魅力を、もう少しうまく使えないかと考えています。もう一つ、この美術館が50年間に、県民や様々な関係者と築き上げてきたコレクションの面白さも、広くいろんな人に分かってほしいとも思います。なにかよい工夫はないかなあ。(館長 貝塚 健)

学芸員が選ぶ“この一点”

高田大《リラックス》昭和59(1984)年 石



高田大《リラックス》昭和59(1984)年 石

作者は、私の美大時代の同級生で隣の部屋で制作していました。彫刻科の記念撮影の補助をした際、全員が相談して背中を向け、足の間から顔を出して撮影するようなチームワークの良さでした。

この作品は作者26歳の時、本館主催の第一回現代日本具象彫刻展で大賞を受賞しました。モチーフは詰襟の学生ですが、なんとその手に持った煙草の先からは煙がたなびいており、煙草がよほど美味しいのか、学生は恍惚とした表情で天を仰いでいます。作品の裏に回ると、もう片方の手があり、表側の続きになっています。その発想とフォルムのユニークさは現代でも通じるウイットに富んでいます。

この作品について美術評論家の弦田平八郎氏は、「この作家の作品には、いつも何か意表をつくようなところがある。意表をつくといっても、人をあっと驚かせるようなものではない。うっかりすると見落としてしまうような、ふっと気がついて微笑みたくなるような・・・」(第一回現代日本具象彫刻展図録から抜粋)と語っています。

昭和55年発売のRCサクセションというバンドの「トランジスタ・ラジオ」という曲の歌詞の中で、男子学生が授業をさぼって屋上で寝転んで煙草を吸っています。学生の内ポケットにはいつもラジオがあり、好きな女の子が教科書を広げている頃、リパブルからのホットな曲がラジオから空に溶けていきます。授業中、あくびしていたら口が大きくなってしまった、居眠りばかりしていたら目が小さくなってしまったという内容の可愛い歌詞が続きます。作詞・作曲は早逝してしまった忌野清志郎です。

歌の舞台は学校の屋上ですが、作品の背景の煉瓦造りの壁は、校舎裏のようにも見えます。作者がこの歌を意識していたかどうかは不明ですが、この歌が作品の印象と重なり、つい微笑ましくなってしまいます。(学芸課 相川順子)

普及課事業の紹介

博学連携事業 二つの展覧会から

「彫刻に触れるときー「さわる」と「みる」がであう彫刻展2024」

会期：令和6年1月30日（火）～2月25日（日）

筑波大学の宮坂研究室との連携事業「彫刻に触れるときー「さわる」と「みる」がであう彫刻展2024」は、立体造形である彫刻の特徴を生かして出品作品は全て触れることを前提として展示し、視覚のみならず触覚でも鑑賞できるユニークな展覧会です。

展示に先行して、昨年9月10日（日）と10月1日（日）の両日に野外彫刻の清掃をしながら直接手で触れて鑑賞するワークショップ「彫刻ピカピカ大作戦」を開催しました。講師の先生は彫刻の制作者でもあり、彫刻制作を行う当事者から素材や歴史、作品から読み取れる作者の痕跡など、具体的な興味深いお話をいただきました。また、視覚に障害のある方やご高齢の方にもご参加いただくなど、誰もが楽しめる美術館（ユニバーサル・ミュージアム）を目指した企画となっています。

会期中にも、粘土を用いた2つのワークショップ①「ハイ！チーズ！ポーズを決めて彫刻を作ろう！」②「音の手ざわりーお気に入りの音の形を見つけよう！」を開催しました（日時：2月4日（日））。また、2月18日（日）にはシンポジウム「ダイバーシティ×アクセシビリティー障壁を超えていく「アートプロジェクト」の可能性ー」を開催するなど、様々な展覧会関連事業をお楽しみいただきました。



ブロンズ彫刻「椅子の女」をメンテナンスしている様子

「メッセージアンブレラー自分の思いを文字や絵にしてみようー」

会期：令和6年3月5日（火）～3月17日（日）

二つ目の展覧会は千葉大学教育学部の加藤研究室との連携事業「メッセージ アンブレラー自分の思いを文字や絵にしてみようー」です。言葉や絵によってメッセージを表現したビニール傘を、県内の中学生に作成を依頼（募集）し、それらを集めロープにつなげて美術館第7展示室に展示する、今年で3年目となる展覧会です。

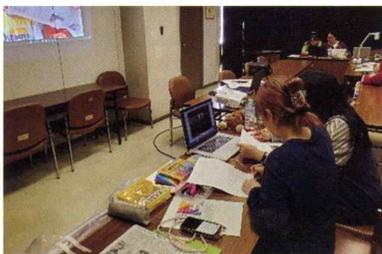
教養展開科目「アートをつくる」の受講生とともに「傘」をモチーフとした空間アートを取り上げた展示により、造形芸術の幅広い魅力を感じていただけたらと思います。（普及課 廣川政和）



昨年度の展覧会風景から

新規事業 ICTワークショップ

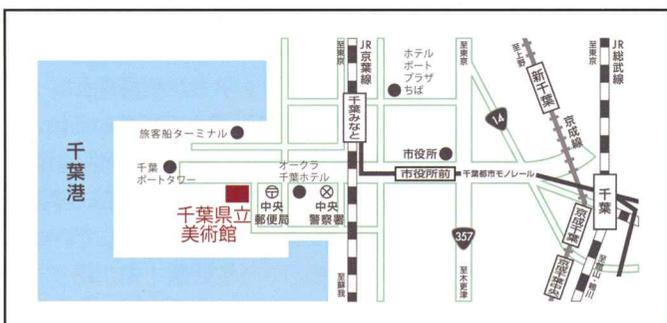
「おうちdeワークショップ～材料変身！自分も変身！」 開催：令和5年10月28日（土）



ICTワークショップ運営の様子

千葉大学教育学部の小橋研究室との連携事業では、ICTワークショップ「おうちdeワークショップ～材料変身！自分も変身！」を新規事業として開催しました。各家庭と美術館とをオンラインでつないで開催するワークショップは、本館初の試みです。Zoomのブレイクアウトルームを活用することで、小橋研究室の学生がまるで参加者の子ども達の隣に座って声をかけているかのように関わることができます。各家庭にあった身近な材料を使って、オリジナルのバックや変身グッズを制作することができました。

今後、美術館に直接足を運ぶことが難しい方や遠方に住む県民の皆様とつながる新たな運営方法として、有効活用していくことができそうです。（普及課 酒井正恵）



〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1
Tel.043-242-8311 Fax.043-241-7880

ちばげんぴ で検索

千葉県立美術館報「みる かたる つくる」VOL.50
（通巻112号）
令和6（2024）年3月10日発行

